

自立の一步は自動車整備

災害救援活動に備え

防衛省初の
能力構築支援
若い兵士を教育

防衛省による初の能力構築支援事業（キャンパシティブルディンク）が昨年11月4日、東ティモールでスタートした。現地で陸自隊員らとともに、同国軍の隊員を対象に自動車整備士の養成に当たっているのが、自衛官OBなどで作る特定NPO法人「日本地雷処理・復興支援センター（JDRAC）」（事務局・

12月12日の開講に先立ち、ホアン・ベドロ・ダシルバ基地支援部長は「諸君がこの国の軍隊の技術者の柱になれ」と訓示、受講生を激励した。これに対し、隊員たちは「選ばれて高い教育を受けることを誇りに思う」と意気込みを語った。

受講者は主に災害救援活動を支える後方支援部隊の隊員たち。これまで自動車整備の技術がないため、救援活動も滞りがちだった。講義中は全員がノートにメモを取りながら熱心に聴講するという。その姿に村田さんは「若い兵士たちが国を誇れる自覚を持ち、冷房のない教場で汗を流す姿に感激した」と話す。

JDRACでは今年度の第一期事業を手初めとして、同国で引き続き防衛省の能力構築支援事業の枠組みによる自動車整備士養成に取り進むこととしており、長期間での活動を視野に入れている。JDRACは平成15年に設立された。自衛官OBを中心に結成。翌年から東ティモールで陸自PKO部隊が撤収した後の仕事を引き継ぎ、コンテナハウスの組み立て支援を開始。その後、不発弾処理技術の指導、23年からは民間技術者や市民らを対象に自動車整備士養成教育を開始し、日本のNGOとしてノウハウを積み重ねてきた。

JDRACの平塚次郎副理事長は「整備士だけでなく国の将来を担う技術教育の養成にも取り組み、同国の発展に貢献したい」と話している。

クラス開始の記念撮影に臨むJDRACの村田監督官（前列左から2人目）と後ろは東ティモール軍隊員ら（12月、メテナロ基地で）



東ティモールでJDRAC

東ティモールの首都ディリから車で約1時間のメテナロ基地で人材育成に当たっているのは、監督官を務める陸自OBの村田拓生氏（66）をはじめ、民間の車両整備士2人と義務1人の計4人。

現在、教官の整備士2人が中心となり、基地に所属する18、20歳の整備隊員11人に日本の自動車整備士3級程度の教育を実施している。教育にあたっては英語、インドネシア語併記の教程を作成し、クラスでは教官が英語を使用し、通訳がインドネシア語に訳して意思疎通を図る。

整備の技術がないため、救援活動も滞りがちだった。講義中は全員がノートにメモを取りながら熱心に聴講するという。その姿に村田さんは「若い兵士たちが国を誇れる自覚を持ち、冷房のない教場で汗を流す姿に感激した」と話す。

JDRACでは今年度の第一期事業を手初めとして、同国で引き続き防衛省の能力構築支援事業の枠組みによる自動車整備士養成に取り進むこととしており、長期間での活動を視野に入れている。JDRACは平成15年に設立された。自衛官OBを中心に結成。翌年から東ティモールで陸自PKO部隊が撤収した後の仕事を引き継ぎ、コンテナハウスの組み立て支援を開始。その後、不発弾処理技術の指導、23年からは民間技術者や市民らを対象に自動車整備士養成教育を開始し、日本のNGOとしてノウハウを積み重ねてきた。

JDRACの平塚次郎副理事長は「整備士だけでなく国の将来を担う技術教育の養成にも取り組み、同国の発展に貢献したい」と話している。